

# かけはし

K A K E H A S H I

今号裏面は、  
「地域連携WEBセミナーに  
関わって」です



医療福祉支援センター長  
小林 利彦

## ポストコロナ時代のニューノーマルを考える

新型コロナウイルス感染症に対して全国各地でワクチン接種率の急増が報告されている状況下、ポストコロナ時代を見すえたニューノーマルのあり方が問われています。人類が、あるいは日本人が、今回の経験を通じて学んだことを後世にどう伝えていくかは今を生きる人たちに課せられた使命だと思います。

われわれ医療福祉支援センターにおいても、外来の診療制限に始まり、感染症患者を含む入院患者さんの退院・転院支援にはずいぶんと苦労しました(今も苦労しています)。また、プライバシーに配慮した個室等での各種相談業務にも一定の制限がかかり、退院支援カンファレンスなどではウェブシステムを利用した運用対応も徐々に増えています。さらに、これまでは、地域の住民や患者さんなどを集めた研修会等を頻回に行っていましたが、会の中止判断やウェブのみでの開催が余儀なくされることも多々あります。実際、ウェブ開催では、遠方にいる方が(移動することなく)気軽に聴講参加できるという利点はありますが、高齢者の多くはその種のシステム利用に慣れておらず、本当にお話を聴いて欲しい方々に十分な啓発活動ができない状況も少なからずあります。

ポストコロナ時代のニューノーマルとして、ロボットやAI(Artificial Intelligence)の活用、DX(Digital Transformation)の推進といったカタカナや横文字の羅列が妙に目立ちますが、採用すべき方法論が存在する一方で、弱者への配慮を忘れてはいけない領域が少なくないように感じます。確かに、講義形式の教育や講演会などであれば、開催地までの移動時間を必要としないウェブ開催は極めて有用であると考えます。また、主催者側にしてみても、大きな会場を借りる必要がないという費用面でのメリットもあります。一方、医療専門職の学会や研究会などでは、集合形式であれば、演者の話を直に聴きながら顔を合わせた議論が可能となり、その後の交流が貴重な人脈確保につながるものが珍しくありません。そういった意味では、ポストコロナ時代でも、対面によるコミュニケーションの価値はこれまでどおりだと思います。

私が今回の経験から改めて感じたことは、どのような事態が起こっても対応できる柔軟な行動姿勢と、自分自身のOS(Operating System)をアップデートするリカレント教育の重要性です。昨今の先行き不透明な時代を表現する言葉にVUCA(Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity)がありますが、どのような状況においても、柔軟かつ適切に対応できる能力が今の日本人には必要な気がします。日本は世界でも自然災害が多い国として認識されていますが、先人達がさまざまな災難を乗り越えてきたように、ダーウィンの「この世に生き残る生物は・・・最も変化に対応できるものである」という言葉が真実なのだと思います。ただし、人生100年時代と言われるように、これまで以上に人が生きる時間はとても長くなっていますので、パソコンなどと同様に、自身のOSをアップグレードしないと新しいアプリケーションも動かせません。言い換えれば、これからのポストコロナ時代、自身の人生におけるリカレント教育は必須のものとなるでしょう。